

佳作

弟から学んだ、日々を生きる

長崎県 長崎県立長崎北高等学校一年 切石宗一郎

昨年十一月、私の家族に、とても悲しい出来事がありました。母が、妊娠十七週目でお腹の赤ちゃんを流産したのです。病院の先生から「男の子だった」と聞き、両親はその子を「響」と名づけました。

両親は、赤ちゃんがお腹に宿ったと分かったときからとても喜んでいて、もし男の子なら「響」、女の子なら「嬉々」と、もう名前まで決めていました。父は、「末っ子になるだろうから、家族の心に響く子に育てほしい。」

と話していて、母は、

「響と一緒に平和公園を散歩するのが楽しみ。」

と、うれしそうに笑っていました。妹も、

「初めての弟と遊びたいな。」

と言って、家族で赤ちゃんの誕生を待ち望んでいました。だからこそ、その喜びが突然なくなってしまった悲しさは、言葉では表せないほど大きなものでした。

その日、学校から帰ると、玄関に父が立っていました。父の顔はいつもと違い、心の中の大事なものがなくなっ

た。響は小さいのに、思ったよりも焼き上がるまで時間がかかりました。その間、いろんなことを考えました。「もっと一緒にいたかった」「どうして響だけが」と思ったり、「命って当たり前じゃないんだ」と思ったり。骨になった響はとても小さかったけれど、人の骨だとわかる形をしていました。箸で拾おうとすると、すぐ壊れてしまいそうで、手が震えてうまくつかめませんでした。「これが響なんだ」と思いました。

骨を拾い終わった後、父と母が話してくれました。

「元気で赤ちゃんが生まれてくるのは、本当に幸運なことなんだよ。」

「だから今いる子どもたちには、その幸運を大事にして生きてほしい。」

母の声は優しくなかったけれど、しっかり心に届く力がありました。その時、私は初めて「自分が元気で生きていること」が、とてもありがたいことなんだと気づきました。

そのころ、私は高校受験の勉強中でしたが、やる気が出ず、模試の結果も悪くなっていました。でも、この出来事のと、「響が生きられなかった時間を、私は生きている」と思うようになりました。眠くても疲れていて

たような表情でした。少し間をあげて、父が言いました。

「お母さんが緊急入院した。」

びっくりして、その場から動けませんでした。さらに父は続けました。

「手術はしたけど、赤ちゃんは助からなかった。でも母さんは大丈夫だ。」

悲しさと、母が無事だったことへのほっとした気持ちで、いっぺんに押し寄せてきて、胸がドキドキしました。後日、母はまだ長崎大学病院に入院していましたが、一時退院して、病院からタクシーで響を連れて「もみじ谷葬斎場」に向かいました。行きは母、父、妹、そして響の五人。葬斎場は坂の上であり、タクシーの窓から見える空は、今にも雨が降りそうな雲に覆われていて風が冷たく感じました。建物の中の家族待合室は広くて静かで、四人で待つには広すぎました。母の隣には響の小さな棺が置かれていて、家族写真で包み込むように飾られていました。響は両手に乗るくらい大きさで、指がちゃんとあり、顔も整っていました。でも、まだお腹の中にいたときの形のままで、とても冷たそうでした。眠っているみたいなのに、もう二度と目を開けないと思うと、胸が苦しくなりました。母はそっと布で顔を隠しました。「もう見えなくなる」と思ったけれど、母がもっと悲しくなるのは見たくなかったので、何も言いませんでした。炉の前に立ち、父は短く手を合わせ、母は静かに泣いていました。妹はずっとうつむいていました。私も手を

も、「響はもう頑張ることもできない」と思うと、自分はまだ頑張れると感じました。

帰り道、坂を下るタクシーの中は静かで、誰もほとんど話しませんでした。行きは五人だったのに、帰りは四人。その事実が胸に重くのしかかりました。

受験当日、私はあまり緊張しませんでした。「ここまで頑張れた」という感謝の気持ちの方が大きかったです。合格発表で自分の番号を見つけたとき、「やったね」と響が言ってくれたような気がしました。

あの日から、私は命に対する考え方が変わりました。命は当たり前じゃなくて、奇跡みたいなものです。家族と笑えること、友達と過ごせること、好きなことに挑戦できることそれは全部、響が生まれることなく終えた人生ではできなかったことです。だから私は、これからも一瞬一瞬を大事にして生きたいです。響がいたのは、たった十七週間だけれども、それでも大切な弟です。